

【1. 概要】

- ・収量確保のため、夏秋トマト栽培において「高接ぎ木苗」を導入し、青枯病を効果的に防除
- ・普及促進のため、5戸12.3aに実証を設置(平成24年度)
- ・46戸4.8ha中、激発3ほ場22aで定着(平成27年度実績:平成24年度比180%増、産地の普及率は5%)

【2. 実践内容】

(1) 取り組みの背景、経緯

- ・トマト青枯病は、接ぎ木苗の利用と土壌消毒により栽培初期の発病は抑えられるが、時間の経過とともに発病し、大きな減収となる
- ・従来より台木の高い節位に接ぎ木する「高接ぎ木苗」の利用により、発病遅延と収量確保に取り組んだ(図-1)

(2) 普及拡大に向けたポイント、成功要因

- ・取り組み開始時は、「高接ぎ木苗」を購入して育苗失敗を回避した
- ・「高接ぎ木苗」は、通常の接ぎ木苗より約10万円/10a高いため、防除効果を実感した生産者は、自ら接ぎ木して経費を節減した

【3. IPMの推進による効果、得られた経験】

- ・「高接ぎ木苗」導入ほ場では、通常の接ぎ木苗導入ほ場より1カ月以上の発病遅延を実現した(図-2)
- ・「高接ぎ木苗」導入ほ場では、導入前の約1.8倍の収量を確保した(平成27年度実績:約10t/10a)
- ・穂木からの青枯病感染防止対策の徹底が課題である

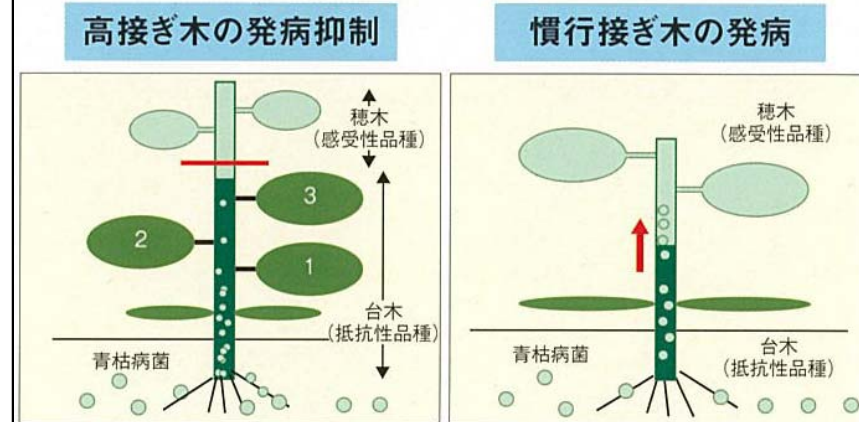


図-1 高接ぎ木法のトマト青枯病発病抑制の仕組み

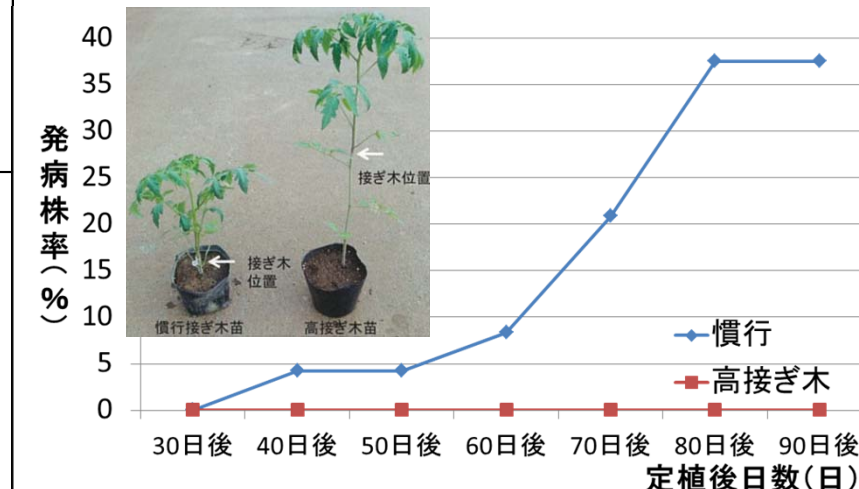


図-2 高接ぎ木によるトマト青枯病の発病抑制効果